

2. 事業の概要と成果

(1) プロジェクト目標の達成度

今年の北部タイは、乾季に記録的な高温・乾燥に見舞われ、森林火災のリスクに向き合う緊張を長く強いられた。このような厳しい日々を経てなお、住民らの活動意欲は旺盛で、3年の事業期間をおおむね順調に全うした。

水源林の再生・保全とともに、森との共存による産業の育成と収入向上につながる活動を推進する本事業において、植林地管理は最も核心的な作業に位置づけられる。最終年となる本年次では、新たな植林は行わず、予定どおり第1～2年次に植林された2村（ホイエン村、メーパックレ村）合計25.6haの植林地管理作業に専念した。

既述のとおり、この乾季は森林火災に対するより一層の警戒に迫られ、パボン村を含めた3村では、特に防火帯の造成・整備、および日々の巡回など心身ともに相当な負担を強いられた。そのような中でも、最終的には2村平均で指標を上回る8割以上の生存率を確保することができた。また、本年次も各種ワークショップを計画的に開催し、3村平均で88%の裨益者が水源林の保全に資する知識や技能を習得したことを確認した。

生計向上の各プロジェクトにおいては、いずれも地に足の着いた事業運営がなされている。メンバーの創意工夫も奏功し、養蜂、養豚、生産物加工の各プロジェクトは指標を凌駕する大きな成果を収めた。

山菜栽培と養魚は指標未達であったが、とり立てて問題視するような課題はない。収入の伸び率は他と比べて遜色なく、前年比も上回っていることから、極めて些細なことであると認識している。ところで、育牛については第2年次での種牛の病死が最後まで尾を引く形となった。繁殖計画の遅れを取り戻すためのさまざまな措置がとられたものの、なかなか良好な結果が得られなかったが、本年2月に自然交配によって2頭のメス牛が妊娠していることを確認した。順調に経過すれば本年11～12月に初の子牛が誕生することとなる。本事業期間内での成果は叶わなかったものの、今後の繁殖計画、および販売計画に大きな期待が持てる。

本年次は最終年につき、事業の持続発展性をより揺るぎなくするための活動にも注力した。日本への視察研修、展示会へのブース出展、最終報告会の開催がその主な取り組みである。これらを通じて、各村での新たな活動計画の策定、住民らが主体となったプロモーション活動の推進、関連行政機関との継続的な連携の確認など、その目的を相応に達してきた。今後は現地提携団体（オイスカ・タイ総局）が中心となって各村での活動を注視するとともに、必要に応じて関係各所と協力しながら適切なサポートを講じていく。

(2) 事業内容

< 1. 森林再生と保全 >

1-1. 水源林となる地域への植林および管理 (対象: ホイエン村、
メーパックレ村)

- ・植林を実施せず管理作業に特化する今年次は、第1年次、および第2年次の植林地 (2村合計25.6ha) において、補植と全4回に渡る管理作業 (草刈り、施肥ほか) を実施した (7月、10月、1月、5~6月)
- ・2村の第1年次、および第2年次の植林地はともに、当初の予定より管理作業を+1回実施している。これは乾季に入った直後に降雨が続き、3回目の作業を予定より前倒した結果、年次末に追加作業の必要性が生じたためである

1-2. 水源林の保全 (対象: 全3村)

- ・森林火災の予防と対策に関する知識と、火災発生時における対処法の習得を目的とした森林火災防止計画ワークショップを開催した (1月/各村40人)
- ・上記の実践として、各村の植林地周辺を中心に防火帯を造成。以降はその継続的な整備作業を行った (2~5月)
- ・年次評価・総括ワークショップを開催し、水源林の役割と効用についてこれまでに修めた知見を確認。保全に関する今後の体制や手法の再構築を行った (5月/各村50人)

1-3. 育苗 (対象: ホイエン村)

- ・メンバーの組織化 (10人)
- ・事前ワークショップの開催 (8月/10人)
- ・資機材の購入と育苗場の建設
- ・苗床整備、堆肥づくり、種や苗木・幼木の購入
- ・種、苗木の植えつけと管理作業の継続
- ・苗木、および幼木の販売
- ・年次評価・総括ワークショップの開催 (4月/10人)

1-4. 青少年への啓発・教育 (対象: パボン村)

- ・青少年への啓発・教育活動として、パボン小・中学校の小4~6の児童30人を対象に森と水、土、人々の暮らしとの関係、および森林資源の活用をテーマにした体験学習を開催 (11月)
- ・既に創出された森を生かした収入向上プログラムに励む住民 (裨益者) 自らが講師となり、本活動の根幹となる森林保全の重要性やその持続可能な利用価値について啓発・教育を施した
- ・あわせて同村内で展開されている各種活動 (養蜂、山菜栽培、養魚、生産物加工) を紹介し、作業体験を通じてふるさとでの取り組みに関する理解を深めた

< 2. 森林を生かした経済活動 >

2-1. 養蜂 (対象: ホイエン村、パボン村)

- ・巣箱、巣枠等の管理作業の継続
- ・外部講師による講習会の開催×2回/村 (ホイエン村=9月/防虫対策と効果的な巣箱の引っ越し/10人、12月/分封時の注意点/8人、パボン村=10月/分封前の注意点、12月/防虫対策と巣箱の温・湿度管理/いずれも12人)
- ・資材の追加供与
- ・分封 (巣分かれ) による巣箱の運営規模の拡大

- ・採蜜（2村とも各4回）
- ・瓶詰め作業、および販売（適宜）
- ・養蜂製品のOTOP（一村一品運動）への登録準備（パボン村）
- ・年次評価・総括ワークショップの開催（ホイエン村＝6月／8人、パボン村＝4月／12人）

※養蜂製品（ハチミツ、ハチミツ入り石けん）のOTOP申請は、県のOTOP小委員会での審査に時間を要し、未だ登録が完了していない。本件はメンバーが引き続き対処していく

2-2. 山菜栽培（対象：パボン村）

- ・メンバーの増員（+10人）
- ・草刈り、施肥等の管理作業の継続
- ・資材の追加供与
- ・外部講師による講習会の開催×2回（8月／水量管理と防虫対策、10月／有機肥料の効能／いずれも35人）
- ・畑地の拡大と給水設備の増設
- ・山菜の収穫と販売（適宜）
- ・年次評価・総括ワークショップの開催（4月／40人）

※本プロジェクトの収支は指標未達に終わったが、これは当初予定になかったメンバーの増員（+10人）が自主的になされたことで、1人当たりの収入が想定より抑えられたためである

2-3. 水供給・浄化装置（対象：ホイエン村、メーパックレ村）

- ・継続的な運用と管理組合員による定期的な点検・保守、売上金の回収
- ・利用促進を目的としたPR（適宜）
- ・年次評価・総括ワークショップの開催（ホイエン村＝4月／5人、メーパックレ村＝4月／5人）

※利用量の向上を課題としているメーパックレ村では、徐々に増加傾向にあるものの完全な自立運営には至っていない。管理組合が中心となって、住民への容器の配布や啓発活動が続けているが、価格や装置の取り扱い説明の掲出など、よりきめ細やかな利用促進策を追加で講じていく

<3. 村落での収入向上プログラム>

3-1. 養豚（対象：ホイエン村）

- ・メンバーの増員（+5人）
- ・臭気の抑制と堆肥化作業の効率化を目的とした小屋への改修（一部）
- ・施餌、小屋の清掃、状態確認等の飼育活動の継続
- ・メーパックレ村での養豚プロジェクトの事前ワークショップの受け入れ（8月）
- ・外部講師による講習会の開催×2回（8月／ワクチン接種時の注意点、3月／人工交配と妊娠・出産時の措置／いずれも45人）
- ・排せつ物の堆肥化に関するワークショップ（9月／育牛プロジェクトと合同／養豚プロジェクトからは25人）
- ・排せつ物の堆肥化作業と販売（適宜）
- ・資材の追加供与
- ・人工交配の実施
- ・販売（子豚を含む）
- ・年次評価・総括ワークショップの開催（5月／40人）

3-2. 養豚（対象：メーパックレ村）

- ・メンバーの組織化（10人）
- ・ホイエン村での事前ワークショップの開催（8月／10人）
- ・資機材の供与と小屋の建設
- ・子豚の購入と納品
- ・外部講師による講習会の開催×2回（9月／個体情報の管理とワクチン接種、12月／疫病の予防と対策／いずれも10人）
- ・施餌、小屋の清掃、状態確認等の飼育活動の継続
- ・排せつ物の堆肥化作業と販売（適宜）
- ・販売（子豚を含む）
- ・年次評価・総括ワークショップの開催（4月／10人）

3-3. 養魚（対象：パボン村）

- ・施餌、状態確認等の飼育活動の継続
- ・栄養価の高いエサづくり、いけすの清掃（適宜）
- ・外部講師による講習会の開催×2回（8月／雨季終盤から乾季にかけてのいけすの運営／20人、6月／今季の活動計画の確認／15人）
- ・販売
- ・池の清掃と新しいいけすの整備、および稚魚の購入と放流
- ・年次評価・総括ワークショップの開催（4月／15人）

※専門家の助言により、魚の成長が鈍化する乾季は活動が非効率であるため休止している。記録的な高温・乾燥により活動の再開が遅れたことで、比較的順調に推移していた販売計画は最後に齟齬が生じたが、それでもしかるべき収支結果を収めた

3-4. 育牛（対象：ホイエン村）

- ・メンバーの増員（+5人）
- ・施餌、小屋の清掃、状態確認等の飼育活動の継続
- ・資機材、および子牛（種牛×1頭、肥育牛×4頭）の追加供与
- ・外部講師による講習会の開催×2回（8月／ワクチン接種時の注意点、3月／感染症の予防／いずれも15人）
- ・排せつ物の堆肥化に関するワークショップ（9月／養豚プロジェクトとの合同／育牛プロジェクトからは15人）
- ・排せつ物の堆肥化作業と販売（適宜）
- ・人工交配の実施
- ・年次評価・総括ワークショップの開催（5月／15人）

※第2年次に種牛が死亡したことを受け、繁殖計画の遅れが大きな課題であった。これを取り戻すべくさまざまな対応を試み、良好な結果がなかなか得られなかった中で、2月に自然交配による妊娠が2頭のメス牛で確認された。順調に経過すれば本年11～12月に初の子牛が誕生する。本事業期間内での成果は叶わなかったものの、今後、子牛の販売による収入の確保に大きな期待を寄せている

3-5. 生産物加工（対象：パボン村）

- ・生産、および販売活動の継続（ハチミツ入り石けん、魚の発酵食品）
- ・外部講師による講習会の開催×2回（石けん＝10月／商品の包装と表示について、魚の発酵食品＝12月／加工時の衛生管理について／いずれも15人）
- ・資機材の追加供与

- ・年次評価・総括ワークショップの開催（石けん＝４月、魚の発酵食品＝４月／いずれも１２人）

< 4. その他 >

4-1. 日本への視察研修（対象：各村の村長ほか指導者層、プロジェクトリーダー、地域緑化行政関係者ら）

- ・本事業終了後、各村で展開されている事業の自立と持続発展的な運営、および公的なサポート体制の強化を図るため、10月上旬に日本への視察研修を実施。各村から指導者層や地域緑化行政担当者など16人（引率を含む）が研修に参画
- ・オイスカ西日本研修センター（福岡市）では有機農畜産業の運営手法を、また近隣の住民グループによる地域振興を目的とした食品加工の製造・販売の事例を視察。さらに宮崎県諸塚村では、FSC（森林管理協議会）認証を受けた森での循環型農林業の運営手法、およびその基盤となる住民組織（自治公民館制度）の体制や役割などについて学んだ
- ・本研修参加者が中心となって村内の意見聴取や各種調整を行い、自村での今後の活動計画をとりまとめた

4-2. 展示会へのブース出展（対象：各村の収入向上プロジェクトメンバー）

- ・各村で生産された商品の販路の拡大、および事業周知を目的とし、県内各地で開催された展示会（≡産業祭）へブース出展した（合計3回）。各村の収入向上プロジェクトのメンバーが主体となって積極的なプロモーション活動が展開された
- ・販売はもとより、ブース周辺を訪れた一般の方々に対し、パンフレットや映像等を活用した事業趣旨の広報活動をあわせて行った
- ・出展実績は以下のとおり
 - ①ソムデット王朝祭（1月／メースアイ郡／3日間出展）
 - ②メンラーイ王朝祭（1月／ムアン郡／4日間出展）
 - ③チェンコン川イルカ祭り（4月／チェンコン郡／4日間出展）

4-3. 最終報告会の開催（対象：各村のプロジェクトメンバー、天然資源・環境省、チェンライ県、チェンコン郡、メースアイ郡、各分野の専門家、オイスカ関係者ら）

- ・チェンライ県の副知事らを来賓に迎え、地域の緑化行政関係者、各分野の専門家、学校関係者ほかを招待し、5月にチェンライ市内のホテルを会場として約200人規模で開催
- ・本事業地を山岳地帯における開発計画のモデルケースとしてPRし、同様の手法を推奨する行政への周知を行った。事業終了後も公的機関からの継続的な支持や協力体制の確保を念頭に、成果物（商品）のプロモーション活動もあわせて行った

(3) 達成された成果

本事業における各村の直接裨益人口は以下のとおり。

※ () 内は事業申請書記載の直接裨益人口

・ホイエ村：103世帯／415人（100世帯／404人）

・パボン村：91世帯／294人（95世帯／305人）

・メーパツクレ村：30世帯／137人（30世帯／135人）

上記を対象に活動を展開し、以下の成果が確認された。

<1. 森林保全と再生>

期待される成果1-1：植林地管理により当該地域の森林環境の回復と保全が推進される（対象：ホイエ村、メーパツクレ村）

指標1-1：適切な管理作業により、第1年次の植林地で80%の生存率を、第2年次の植林地で70%の生存率をそれぞれ確保

→当初の予定より+1回の作業を年次末に実施。2村平均で第1年次の植林地は86%、第2年次の植林地は85%の生存率を確保している

期待される成果1-2：各種啓発活動により、住民が地域環境との共生、および森林保全に関する知識と情報を習得する（対象：全3村）

指標1-2：3村で累計120人を対象としたワークショップを開催し、80%の理解が得られる

→森林火災防止計画ワークショップ、および年次評価・総括ワークショップを3村で開催。前者は森林火災の予防と対策に関する知識と技能を、後者は水源林の保全に関する知見と情報を確認。小テストを通じ、3村平均で88%の理解が得られたことを確認した

期待される成果1-3：青少年への環境啓発・教育活動により、森林保全とふるさとでの取り組みに対する理解が次世代へ訴求される（対象：パボン村）

指標1-3：パボン村の生徒30人を対象に開催し、80%の理解が得られる

→パボン小・中学校の小4～6の児童30人を対象に体験学習を開催。森林資源の活用法や同村で展開している収入向上プログラムについての知見を深めた。事後の小テストを通じて95%の理解が得られたことを確認した

なお、これらの活動は「持続可能な開発目標（SDGs）」における当該目標のうち、目標1（1.5）、目標4（4.7）、目標6（6.6）、目標9（9.1）、目標12（12.8）、目標15（15.2）の達成に貢献していると考えられる。

<2. 森林を生かした経済活動>

期待される成果2-1：持続可能な手法での産業活動を継続し、住民の所得が向上する（対象：ホイエ村、パボン村）

指標2-1：養蜂で+8%、山菜栽培で+10%の収入を確保（いずれも年収ベース。事業開始時に採取したサンプル比）

→第3年次終了時点での各活動における収支結果から算出した数値は以下のとおり

・養蜂（ホイエ村）：+8.7%（指標比+0.7%）

・養蜂（パボン村）：+10.9%（指標比+2.9%）

・山菜栽培（パボン村）：＋８．５％（指標比▲１．５％）
指標２－２：養蜂で６０％以上、山菜栽培で８０％以上のメンバーが活動を継続（事業開始時比）

→養蜂について、パボン村ではメンバーの減少が見られたが、指標を上回る人員を確保している（８０％）。

第２年次にメンバー減が見られたホイエン村では、今年次も増減を経て、現在では当初の５３％の人員で活動を継続している

→山菜栽培は全員が活動を継続。さらには、今年次の事業計画にはなかったものの、自主的に１０人のメンバー増がなされた

なお、これらの活動は「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」における当該目標のうち、目標２（２．３）、目標１５（１５．１）の達成に貢献していると考え。

< 3. 村落での収入向上プログラム >

期待される成果３－１：地域特性に見合った産業を創出・継続し、住民の所得がさらに向上する（対象：全３村）

指標３－１：養魚と生産物加工は＋１０％の収入を確保。育牛は＋３％、養豚（ホイエン村）は＋６％の収入確保（いずれも年収ベース。事業開始時に採取したサンプル比）に加え、それぞれメンバー５家族を追加

→第３年次終了時点での各活動における収支結果から算出した数値は以下のとおり

・養魚（パボン村）：＋９．０％（指標比▲１．０％）

・生産物加工（パボン村）：＋１１．０％（指標比＋１．０％）

・養豚（ホイエン村）：＋１１．６％（指標比＋５．６％）

※メンバー５家族追加

・育牛（ホイエン村）：＋１．４％（指標比▲１．６％）

※メンバー５家族追加

指標３－２：養豚（メーパツレ村）は＋３％の収入を確保（年収ベース。事業開始時に採取したサンプル比）。

→第３年次終了時点での収支結果から算出した数値は以下のとおり

・養豚（メーパツレ村）：＋１０．８％（指標比＋７．８％）

指標３－３：８０％以上のメンバーが活動を継続（プロジェクト開始時比）

→養豚、育牛の各プロジェクトの全員が活動を継続。また、養魚は７５％、生産物加工は８０％のメンバーが活動を継続している

なお、これらの活動は「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」における当該目標のうち、目標２（２．３）、目標１２（１２．８）の達成に貢献していると考え。

< 4. その他 >

期待される成果４－１：日本への視察研修により、本事業終了後の各村での活動が継続・発展していく（対象：全３村）

指標４－１：オイスカと研修参加者が中心となって各村の新たな活動計画が策定され、事業終了後も活動が継続される

→研修参加者を中心に策定された活動計画の下、各村での

	<p>活動が現在でも主体的に継続されている</p> <p>期待される成果 4-2：展示会への出展により、事業の持続発展性が高まる（対象：全3村）</p> <p>指標 4-2-1：展示ブースへの来場者が1,000人を上回る →全3回の展示会で行った実数調査で、ブース訪問者数が累計3,128人に及んだことを確認した。 また、事業概要パンフレットの配布数は4,875枚であることを確認した</p> <p>指標 4-2-2：メンバーによる商品販路の拡大と活動の周知が主体的に行われる →ブース出展に携わったメンバーを中心に、商品の多様化とインターネットでの販売体制の構築などを推進。商品力と販路力の強化、および活動趣旨の周知に努めている</p> <p>期待される成果 4-3：最終報告会の開催により、行政への理解がさらに深まる（対象：全3村）</p> <p>指標：4-3：タイ政府が推奨する開発計画を実践した村として認知され、そのモデルケースとして行政や専門家からの継続的な支持が得られる →行政、および地元緑化行政機関との関係は良好で、綿密なコミュニケーションが保たれている。また、他村からの視察やテレビ番組の取材を受けるなど、認知度と外部からの評価は高まりつつある</p> <p>なお、これらの活動は「持続可能な開発目標（SDGs）」における当該目標のうち、目標12（12.a）、目標17（17.16）の達成に貢献していると考えられる。</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p><1. 森林再生と保全></p> <ul style="list-style-type: none"> ・冒頭でも述べたとおり、今年の北部タイの高温・乾燥は例年になく厳しいものであった。北部タイにおいて、乾季における森林火災は決して珍しいことではないが、ホイエン村とメーパックレ村内でも実際に火災が発生し、本事業地以外の植林地や住民らの畑地が少なからず被害を受けた。しかしこの有事に、被害の拡大を防いだのは本事業の植林地管理メンバーらによる迅速な消火活動である。このことは何より、これまでのワークショップ等による教育・啓発と、防火帯の造成・整備等の実践活動が結実したものと換言できる。同時に、地域の森林や生活圏を住民が能動的に保全しようとする意識（＝オーナーシップの意識）も汲み取ることができる。火災は不幸な出来事ではあったが、本件を俯瞰すると住民らの一連の行動と理念を評価できる事案であったと捉えている（対象：ホイエン村、メーパックレ村） ・ホイエン村で新たに立ち上げた育苗プロジェクトが基点となって、永続的な緑化活動を可能にする素地が整った。既に自村内の植林地へ補植用の苗木を供給したほか、近隣の村で実施された植林プロジェクトへも苗木を提供している。同村だけにとどまらず、周辺地域を含めた緑化活動における同心円の中心として、今後大きく貢献していくと考えられる（対象：ホイエン村） ・第1～2年次に植林を実施した2村（ホイエン村、メーパックレ村）では、これまで適切な管理活動が継続され、良好な生存率を得た。本年3月には、緑化技術の専門家による植林地での実地調査と住民へのヒヤリングが行われ、学術的な見地による評価（調査報告書）

を得ているので、別添を参照されたい。2村での森林再生を確実なものとするために、今後も必要に応じて自己資金を投入しながら住民による管理作業を継続していく。また、パボン村を加えた3村で、乾季における森林火災の予防と対策（防火帯の造成、消火用具の整備ほか）に万全を期す（対象：全3村）

<2. 森林を生かした経済活動>

- ・養蜂、山菜栽培ともに事業期間を通じて着実なステップアップを図った。特に養蜂については天候や害虫など最も多くの問題に直面しながら、試行錯誤を経て2村ともに指標を上回る収支を得た。このことは大きな自信になったと確信している。山菜栽培の収支については指標未達であるが、これは当初の予定になかったメンバーの増員（+10人）によるものであり、まったく問題視していない。活動の裾野がさらに広がり、結果的に運営体制の強化が図られたことは、むしろ賀すべきことである。ところで、メンバーの大部分が高齢者で構成されている本プロジェクトは、収入のみならず彼らの心身の健康増進にも寄与している。活動が継続することで、このような副次的な成果も認められたのは望外のことである（対象：ホイエン村、パボン村）
- ・第2年次に2村（ホイエン村、メーパックレ村）に設置した水供給・浄化装置は、メーパックレ村で利用量促進という継続課題があるものの、管理組合による定期的な点検、保守、売上金の管理が施され、おしなべて堅調な運営をしている。売上金は保守に関わるコストに充てられるほか、余剰金を地域の森林保全に係る資金として再分配する仕組みを構築している。安全な水の提供とそれを供給する水源林の保全は一枚岩の取り組みで、本装置の利用はその一翼を担っている（対象：ホイエン村、メーパックレ村）
- ・各プロジェクトでは本年次も自主的なミーティングや勉強会を定期的に催すなど、メンバー間のコミュニケーションは活発であった。年次末にはすべてのプロジェクトで最終評価・総括ワークショップを開催し、これまでの足跡、現状の課題、今後の計画等を共有した。一部のプロジェクトではメンバーの減員が見られたものの、現存メンバーの意欲は高く、今後の持続発展的な活動に期待が持てる（対象：全3村）

<3. 村落での収入向上プログラム>

- ・ホイエン村の養豚、パボン村の生産物加工の各プロジェクトは、収入向上プログラムの牽引役である。指標を凌駕した収支面での実績もさることながら、より高い収益性を確保するためのさまざまな取り組み（人工交配の促進と子豚の販売、商品ラインナップの拡充等）に強みを持っている。本年次に立ち上げ、僅かな期間で大きな成果を収めているメーパックレ村の養豚は、ホイエン村に師事した結果でもある。事業運営上の試行錯誤は時には後退を意味することもあったが、これらは糧として確実にメンバーへと培われた。この経験は、プロジェクトの今後の持続発展性の拠り所として大きな意味を持つと考えられる（対象：全3村）
- ・養魚の収支は指標未達であったが、乾季が長く続いたことによる活動休止期間の長期化が影響した。養魚に限らず、プロジェクトが環境条件に左右されるのは避けがたいことであるが、それでも他のプロジェクトと比して遜色ない数値を確保したことは、事業運営能力に地力がついてきたとも解釈できる。現在は既に、新しいいけすの

整備や稚魚の放流などを済ませ、今シーズンに向けた取り組みが始まっており、メンバーの活動意欲はしっかりと保たれている（対象：パボン村）

- ・育牛については既述のとおり、第2年次での種牛の病死が大きく影響し、本事業期間内で予定した繁殖計画を進捗させることができなかった。しかしながらこの間も、隣村から種牛を借用するなどの策を講じたり、排せつ物の堆肥化と販売を地道に進めるなど、メンバーの活動意欲が衰えることはなかった。自然交配による妊娠が2頭のメス牛で確認されたことから、本年11～12月を目安に新しい子牛の誕生が待たれることになる。繁殖計画と販売計画はこれを契機に再度立案・整備され、遅まきながら事業の展望が開けてきたと考えている（対象：ホイエン村）。
- ・各プロジェクトでは本年次も自主的なミーティングや勉強会を定期的に催すなど、メンバー間のコミュニケーションは活発であった。年次末にはすべてのプロジェクトで最終評価・総括ワークショップを開催し、これまでの足跡、現状の課題、今後の計画等を共有した。一部のプロジェクトではメンバーの減員が見られたものの、現存メンバーの意欲は高く、今後の持続発展的な活動に期待が持てる（対象：全3村）

<4. その他>

- ・一部の生計向上プロジェクトにおいてメンバーの離脱が見られたが、健康上の問題や本職への負担を挙げており、薄志弱行な理由は皆無であった。離脱したメンバーについては、各個人の問題が解消されればプロジェクトへの復帰を推奨しており、常に門戸は開かれている。また、年次末に行った各村の裨益者に対するアンケート調査では、84%の住民が今後も活動を継続したいとの意思を示しており、メンバーの活動意欲は今なお高く保たれている（対象：全3村）
- ・オイスカの指導の下、各プロジェクトは組織化されたメンバーによる運営、マネジメントがなされており、持続的な事業の運営体制が構築された。現地提携団体（オイスカ・タイ総局）のスタッフによる日常的な巡回とあわせ、必要に応じて自己資金の投入や日本の企業・団体等からの側面的なサポートを組み合わせ、各村での今後の活動を注視していく（対象：全3村）
- ・森林再生と収入向上を並行して進める本事業システムは、タイ国政府が奨励している同国山岳地帯の開発計画に合致するもので、そのモデルケースとしての期待は大きい。展示会へのブース出展や最終報告会の開催など経て、周辺地域への認知は着実に広まりつつある。また、事業期間後ながら本年7月には、パボン村での各種活動が同国のチャンネル3の取材を受け全国に放映されるなど、本事業のインパクトは多方面に及んでいる。オイスカは今後も積極的な外部発信を継続していくとともに、公的機関との連携などを含めた広報面でのサポートを展開していく（対象：全3村）